

<b>Title</b>	郷紳の歴史的性格をめぐって：郷紳観の系譜
<b>Author</b>	重田，徳
<b>Citation</b>	人文研究. 22 巻 4 号, p.289-301.
<b>Issue Date</b>	1971
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	船津勝雄教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

# 郷紳の歴史的な性格をめぐって

——郷紳観の系譜——

重田 徳

1

(一) 郷紳という存在が注目を浴びたのは、もともと、近代中国におけるその社会的生態によってであった。そこでは、郷村社会の指導層・実力者という評価から、「土豪劣紳」|| 反封建斗争の打倒目標という規定までが、郷紳イメージの振幅を決定し、それに「官僚||

地主|| 商人・高利貸の三位一体」という周知の命題がオーヴァラップしていったといっていだろう。郷紳がアヘン戦争以後の中国近代の変動の中で頭角をあらわし、階級対立の一方の主体として、半植民地・半封建化中国の規定を体现するものであったことは疑いない。

アヘン戦争期の反英斗争に、それは中央政府にかわって指導的役割を演じたとされているし、<sup>(1)</sup> 太平天国においては逆に農民軍と対立しつつ、同じく清朝正規軍とは異った独自の私的民軍|| 郷勇が重要な役割を果たした。すなわち、通常、清末政治史における漢人の抬頭と評

価される現象は、同時に郷紳が政治過程におけるその独自の存在を鮮明にしてゆく過程でもあったのである。<sup>(2)</sup> そのことに疑いはないにしても、それは、いわば、かつてそれを覆っていた王朝支配の外被が透けてき、ついにはとりのぞかれてゆくなかで、その赤裸な姿をあらわしたということにほかならず、郷紳の存在とその支配は、実体的には、むしろそれ以前に形成されていたものとみななければならない。

「郷紳」の用語の一般的使用が、明代中期まで遡ることは今日ではほぼ確認されている。<sup>(3)</sup> ただ、それは、いうまでもなく、歴史的範疇としての郷紳がそこで形成されたことを、ただちに意味するものではあるまい。つまり、郷紳概念に含ませる内容規定如何によつて、その起原は更に遡りもするし、逆にくり上げられることもありうるからである。

(二) 郷紳の性格規定として、今日でも影響力をもっている一方の代表的見解は、根岸信氏のそれであろうが、氏の郷紳概念の特徴は、

郷紳の歴史的な性格をめぐって



一口でいえば、郷紳を、「古今東西を問わず、一定の時期に於ける一定の地域に於て、多少の差こそあれ」必ず存在するところの、「民衆を指導統率する階層」という視角でとらえ、その一形態とする点にある（同氏『中国社会に於ける指導層——耆老紳士の研究——』平和書房、一九四七）。実は、これは、その例示にしたがえば、ヨーロッパ封建社会の領主・武士・僧侶、近代資本主義社会における「実業家及び之に附属する俸給生活者」に比せられるというのだから、殆んど支配階級という概念に異ならないのだが、氏は郷紳をむしろ民間自治団体の代表とおさえ、公的支配者としての国家・官僚と一線を画する（ことさらにそれをいうのは両者を同一視する考え方があるからである。後述）ので、いわば事実上の関係として、それを指導層と称するのである。そのような在地の有力者、氏の言葉でいえば「親民紳」として、郷紳の意義と機能は、基本的に官民の媒介者たる点に求められる。すなわち、郷紳は、宗族・ギルド等伝統的に自治的生活を営む民衆の統率者代表であり、下意上達のパイプをなすとともに、また官の代理として、その上意の下達に努力し、更にはその行政に協力して、「治安維持・民食確保・排難解紛（裁判調停・紛争解決）、官民連絡・善挙勸業・移風易俗」等の職分に任ずる、とするのである。氏が清代民政に練達していたとして引用する汪輝祖の説——「官（知県）は民と疎隔し、士（郷紳）

は民と接近する。民の官を信ずることは士を信ずるに及ばない。朝廷の法規は尽く民に諭すことは出来ぬが士に説明し易い。先づ士に諭し、士をして民に転諭せしむれば、道明にし易く、教も行ひ易い。管内に良士あれば官を輔け化を宣べることが出来る。各郷は区々であつて、作物に適不適あり、旱水災害勢を異にし、風習も亦良悪がある。……何れも胥吏の言ふことが証拠とするに足らず、唯士の意見のみ信頼するに足る」——<sup>(4)</sup>は、氏の郷紳観においても、その核となつてゐるといつてよい。したがつて、氏のあげた郷紳の職分のうち、「官民連絡」とある一項は單に他と並列さるべきではなく、それこそが郷紳の位置にかかわる基本的な性格規定であつて、それがあるがゆえに、本来国家の行政範囲にほかならない他の諸側面が、郷紳の職分に擬せられることになると思われる。いわば郷紳はそこでは官僚制を補完する存在なのである。ただ、氏の郷紳観の背後には、かつて中国研究者の多くをとらえていた特徴的な中国社会観があるであつて、国家は租税徴収と治安維持以外に、民生にかかわることなく、そのために、これらが民間の中間諸団体の自治的機能に委ねられていたのが中国社会の特殊性であり、したがつて郷紳は本来的な職分としてこれらの諸機能を果し、それをベースとして郷紳たるの地位をもち、またその同じレベルで官民連絡のことも担当したとみるのである。



それにしろ、郷紳をこのような中国官僚制の特質と不可分な「官民の媒介者」としての機能にとらえる限り、それは官僚制の歴史と共に古い、いわば超歴史的な範疇となり、たまたまその称呼が明清時代に顕著になるにしても、実質的、内容的にはその存在ははるかに遡らされることになる。事実、氏の郷紳論の地平は結局漢代まで及ぶのである。むろん、氏がその中に歴史的な区別を全くしていないのではないが、その場合も、それは氏の郷紳規定そのものから帰結するのではない。要するに、氏においては郷紳はいわば一つの機能概念、ないし位置の概念であって、それを満たす歴史的内容まで一義的に規定しうるものではないのである。

(三) このような郷紳観の背後に横たわるのは、先にふれたように、中国の専制支配、ないし官僚制の特質をその社会Ⅱ民衆との隔絶という点におく認識であつたとおもわれる。今日では、そのあらわな発現はみられないが、かつて中国史について「国家と社会との分離」という特徴的な見方があつた。<sup>(補1)</sup>すなわち、旧中国の社会は、国家の権力支配の及ぶ領域、つまり国家と、その及ばぬ領域、つまり社会とに分離して、互いに深い交渉をもたぬまま、それぞれ独自の展開を遂げて後世に及んだというのである。めまぐるしい王朝交替と、にも拘わらず、それが結局同一の構図の再生産に結果して、社会の質的变化にかかわらない、という中国史の与える一般的なイメ

郷紳の歴史的な性格をめぐって

ージに、その二元論は適合し、多くのヴァリエーションを生んだ。いわく、歴史ある国家と歴史なき(停滞的)社会、動く世界と動かない世界、知識人の世界と文盲の世界、あるいは儒教の世界と道教の世界、更には搾取者の世界と被搾取者の世界等々——。それはあたかも中国社会の謎を解くマスター・キーのごとく、人々の中国観の基礎視角となつたのである。

戦後初期に、このようないわゆる「旧中国社会の特質論」を最も意識的に批判したのは松本善海氏であつた(『旧中国社会の特質論への反省』及び「旧中国国家の特質論への反省」『東洋文化研究』九及び一〇)。氏はそれを佐野学「清朝社会史」の批判を通じて行つたのであるが、事実、佐野氏においては、ことさら法則的把握の意図が強かつたために、先のような見解も、たとえば、「国家及び社会遊離の法則」と称されて、最もラディカルな相貌を呈していたのである。ついでにいえば、佐野氏のいう旧中国に固有なる法則の第一は、「中間的社会団体優越の法則」である——これを根岸氏が郷紳の母体としたものにはかならない——が、この二つの法則が対をなすことはいうまでもないだろう。すなわち、国家が租税収奪と治安維持にしか関心をもち、民衆も国家をそのようなものとしてしか期待しなかつたために中間的社会層(宗族・家族・村落・ギルド等)にその生を托さざるをえず、それを日常の安全を保障する組織とし



た、というのである。この関係は相互規定的であるから、そのどちらを基礎的認識とするかで逆の方向にも展開される。つまり、中間団体レベルの自治の堅固さが、中国社会の特質であつたとおさえれば、そのため国家権力はそこまで滲透しえなかつたとする論理展開が、すぐさま可能になり、むしろ、その形の方が一般的であつたのである。

(四) ところで、佐野氏にあっては、根岸氏とちがい、問題の郷紳はこの中間的諸団体の統率者に擬せられるのではなかつた。そうではなくて、前二者を裏づける第三の法則、「階級相互疎隔の法則」によつて、支配階級の中に属せしめられているのである。すなわち、戦国末期から、国家機関を独占する官僚群と、それに参与することなき半奴隸的な農民群との二大階級が成立し、その後の階級関係の原型となる。時代につれて前者は、官僚、貴族、地主、豪紳の諸層を生じ、後者は農民、家庭奴隸、不自由手工業者、都市窮民等の諸層を生じたが、両者は生活方法もイデオロギーも異種的であつて、階級周流作用はほとんど行われず、前者は国家を私物化し、後者はまた国家の運命に無関心であつた、というのである。

周知のように、この考え方は橘樸氏の中にその先蹤をもっている。「支那の官僚群は国家又は民族なる全体社会の中に在つて一つの部分社会を構成して居ると同時に一つの社会階級を構成し、而も

支配階級として国家乃至民族の最上層に位するものである」「斯様なわけで支那国家又は支那民族なる全体社会は上に官僚階級があり、下に農工商の各職業者を包含する民衆があつて縦に相對峙して居ると云ふことになるのである」(『支那社会研究』日本評論社、一九三六)。この官僚の中には文武の官僚、及びそれに準ずる者が含まれる。したがつて郷紳は官僚と等置されて支配階級一般に属せしめられるのである。佐野氏もまた、「旧中国の官僚は單に国家の機構であるのではなく、寧ろ国家の主人であつた。又それは單なる社会層でなく、寧ろ一の社会階級であつた」といい、更に、「旧中国国家は完全に支配階級たる広義の地主的階級の独占物で、この階級は在朝の官僚と在野の豪紳及び大地主より成り、官僚も官を罷めて帰国する時は豪紳となり、豪紳は官途に就けば官僚となる」(傍点引用者、以下同じ)といつて、両者を全く同一視している。すなわち、ここでは中間者という視点はなく、むしろ王朝支配体制内の實質的支配階級という観点が優越する。いいかえれば、「皇帝—民」という関係、したがつて官民という対立を基本的と考えるのである。この中で、在朝官僚と在野の郷紳との相違は捨象されるのである。<sup>(5)</sup>したがつて、いうまでもなく、ここでも郷紳の實質的起源は明清をこえて著しく遡らざるをえないだろう。



と同時に、ここにおいて、一見類似しているかに見える先の根岸氏の中国社会観とこれら二氏のそれとの間に、かなりひらきがあることも判明するであろう。簡単にいえば、両者は、中国社会を国家と社会の分離としてとらえる視角においてはたしかに共通しているにしても、一方は郷紳を支配者として「国家」の側にふくめ、他方は在野の中間諸団体の統率者として、これをいわば「社会」の側に属せしめるのである。したがって、佐野氏の場合、中間的社会団体優越の法則といいながら、そこには自治的結合どころか階級疎隔という大きな断絶が設けられてしまうことになる。あるいは、もしそうでなければ、中間諸団体は、地主、郷紳といった首長層を全く含まぬ純小農的な団体ということになり、著しく現実性を失ってしまう。いづれにしても、佐野氏の「階級疎隔の法則」は前二者、少くとも「中間的社会団体優越の法則」とは両立しえないのである。

2

(五) さて、松本氏の批判点は、むろん、両者に共通する前提としての国家と社会の遊離論にあった。その立場は結局、国家と社会とを分離ではなく、より即応的なものとしてとらえなおす、いわば政治過程と基礎過程の問題として統一的に把握しようとする方向であり、その際、どちらかといえば国家権力の滲透という観点が強

郷紳の歴史的性格をめぐる

調されたのであった。たとえば、氏は、佐野氏が「国家も農民が納税さえするならば村落自治に手をつけようという政治的欲望を起さない」とする点を批判して、むしろ徴税のためにこそ政治の干渉が村落の中にまで入りこんでいるのだといい、そのように、いわゆる村落自治が官治によって再編成されており、農民の組織的把握が確立しているからこそ、一見分離ともみうる位置にまで国家は退くことができたのだ、という。このような国家権力の強調は、当然、地主階級をも、「汎農民」として、その支配に服しその力をかりて農民を収奪するはかなかったものとして、位置づけることになる。要するに、それは国家と社会との統一的把握を、国家権力の優越性と階級支配関係からの相対的独立性を強調し、したがってディスポティズムの概念に沿って果そうとするものであった、といえよう。

氏のこのような立場は、時を同じくして歴史学研究会の大会が学界全体の課題として意識的にとり上げ（『国家権力の諸段階』岩波書店、一九五〇）、以後、基本的に、今日まで持続している問題観とほぼ視座を共通にするものであるといつてよい。その際、とりわけ、古代史の領域において、国家権力の問題が強調されたことは、古代国家の特質からしても、天皇制批判にからむ、当時の問題意識からしても、理由のあることであつた。これらについては今改めて多言を要しないであろう。ただ一言つけ加えたいのは、むしろ、中



国史研究の焦点をそのディスポティズムの成立の問題に据え、秦漢帝国の形成過程の分析を通じて一貫して追求してきた西嶋定生氏の方法が、古代国家権力の形成の側から社会——この場合共同体——の問題をもカヴァーしようとしているのに対し、それを批判する増淵龍夫氏（及びそれを独自に「あまりに独自に」継承・展開している谷川道雄氏<sup>(6)</sup>）の立場が、同じく共同体の意義を強調しつつも、その視角、及び共同体のイメージにおいて、どちらかといえば、かつての「国家と社会分離論」の系譜につらなる、とみられる点である。更にいえば、この対比は、均田制の実施、不実施論にも影を落しているといえよう。

(六) ところで、当の松本氏においては、問題の郷紳はどのようにとらえられているであろうか。『支那地方自治発達史』以後の氏の描いた、最も包括的な中国史像を示す『世界の歴史 東洋』（毎日新聞社、一九五三）においては、郷紳は次のような文脈であらわれる。「秦漢時代にはなお孤立して封鎖的であった自然の村落が、そのまま専制国家をささえる社会的な基礎をなしていたのに、（豪族がその自治機関を自己の専制機関と化し、あるいは彼らのつくり出した独自の結合によって引裂いたので）隋唐時代となると、そうした村落の保存のためには、国家がより積極的に乗り出さなければならなくなつて」きた。「隋唐の改革によって、国家権力は村落内部にまでは

つきりと透過してきたわけであるが、こうした外からの政治的な力で作り出された行政村には「それなりのよろさがあり、均田体制の一連の諸制度にひびが入ると忽ち村落結合の解体が兆す。それを破壊したものは新たな社会結合の形としての荘園の拡大——没落した均田農民にとって、それは国家の画定した郷里の外にも生きうる世界が出現したことをいみした——と、民衆の間に生れた組合的結合関係ともいふべき社邑または社の展開である。これらは共に中世村落を志向するものでありながら、その方向への変貌を遂げきらず、結局、つぎの時代になつてはつきりしたことは、村落の自治組織が官僚主義の落し子である郷紳の専制するところとなつたという事実である」と。ここでは郷紳の歴史的登場はかなり意識的におさえられながら、それは「官僚主義の落し子」として、基礎過程の展開の脈絡をさえざる形で、上から不意に天降ってくるのである。つまり、そこには、「絶えず下から生れ出る新しい結合関係が有力になる」と「いつの間にか上から作り出される組織の中に吸収され」、もしくは「その組織を補助する機関に転化されていく」という状況が出現し、それはまさに隋唐にはじまる科擧制度が、下から伸び上ってくるものを官僚層の中に吸い上げて、新しい階級的結成を阻んだことと照応する。この観点は、国家権力の優越によって基礎過程を包摂してゆこうとする氏の基礎視角の具体的形式なのである。それにし



ても、以後村落の代表者は、村落の実権者でなくなる——つまり、府兵制から募兵制への移行に伴い、村落の代表者たる地位は特典ではなく、かえって負担となり、そのため輪番制すら考えられて、彼らは村落の実権者のロボット化する、そしてその実権者こそ「準官僚」といふべき郷紳<sup>(7)</sup>である、というのだから、郷紳は在地の歴史的变化の中から形成されたものでないことは明白である。すなわち、氏の場合、郷紳の歴史的な性格は、一面において「村落の支配者の父老より郷紳への転換」として明瞭に意識されており——それは氏のいう「封建主義への傾斜」を表徴する現象の一つである——ながら、他面、それは村落の代表者ではなく（かといって莊園所有者でもない）、官僚制の落し子、準官僚として、いわば官僚制の側に出自をもつことになるのである。これは先の根岸説対橋・佐野説の対比でいえば、むしろ氏の批判した後者に近い考え方であるといえよう。（但し、豪紳＝官民の接触の場合、という観点は氏にもある）。

(七) この、郷紳を「官僚主義の落し子」とみる見方は仁井田陞氏にも継承されている（『中国法制史研究 刑法』東大出版会、一九五九、二三頁「官人支配の落し子といふべき郷紳<sup>(7)</sup>」）。しかし、氏の郷紳観、更にはその奥にある中国社会構造の把握は、松本氏とややニュアンスを異にするようにおもわれる。たとえば、氏は、刑罰権と社会構造との関連を考察するに当り、まず松本氏にしたがって、「社会と

郷紳の歴史的な性格をめぐって

国家の分離」という「ドグマ」を打破する用意が必要だとし、国家権力の滲透をみとめて「国家法の人的適用関係は直接人民の一人一人に及ぼうとする。古代中国の戸籍制度は、このような個別的人身支配をねらったもののよい例である」「刑罰権についても……（ことに古代にあつては）国家支配を社会の底にまで滲透させ貫徹せよ」とする国家的意図をもち、刑罰権の国家的独占を指向<sup>(8)</sup>していたとしつつ、次のような留保をつける。「しかしそうでありながら——近代国家とは異つて——国家権力は社会内部の共同体を媒介として始めて十全に人民に刑罰権を及ぼし得たことがなかったか。……国家は刑罰権のある部分を、家共同体または村共同体にあずけるとさえたのではなからうか。共同体内の支配権力——たとえば地主のそれ——は、また国家的権力と結びつき、二つの権力の間に分ち得ない一貫性をもつことがなかったか。しかも他面、共同体内の権力は、国家の刑罰権を阻外して、共同体内に自ら独立の刑罰権をもつことを可能ならしめていたのではなかつたらうか」と。すなわち、ここには、専制体制を制約し、ないし補完する、かのいわば「中間的社会団体」の意義がもち出されてきているのである。実態調査にもとづく、ギルドと家族・村落の研究が氏の業績の一つの核をなしたかぎり、それは当然の帰結であるともいえよう。結局、氏はこの二つの契機を調整するために次のようにいう。「ところで



村落内の権力の把持者——郷紳の類——に支配された村落は、ある人たちがいうように、国家権力から分離していたものとしてよいのであろうか」と先の批判をくりかえしたのち、「中世的なこれらの諸集団は、国家権力から分離したものとなっていたわけではない。国家権力は集団内部に必ずしも滲透していなかったわけではない——

——集団内の民衆は、集団の支配と国家の支配と……二重の支配に服することとなった——。そればかりでなく国家権力は集団内ボスと不即不離の關係にあった。村落内ボスは国家権力の利害と反する場合には、小作を含めて一般村民と共同に抵抗さえ敢てした。しかし彼らは国家権力と利害を同じくする面をも同時にもっていたのであった。郷紳・地主は権力支配の主体者側にも廻るのであって、国家は権力の実現のためには、郷紳・地主を自己の側にひき入れる必要があった」と。ここでは明らかに根岸氏風の郷紳観が発想のベースであり、それに郷紳を支配者にとらえる構図をもつ——そのいみで橘・佐野・松本氏につらなる——「国家権力」の磁場配置が視角としてオーヴァラップした結果、郷紳は社会の側にも、国家の側にも属するいわば「ぬえ」的存在たらしめられたのであり、国家権力の評価についても、結局、「『アジア的』」とか『東洋的』」とかいわれ、……その強大さをうたわれる旧中国の国家権力ではあったが、他面権力の貫徹には限界があり、国家は諸集団とも複雑なつながりをし

ていた」という結論に落着くことになったのである。

3

(八) 以上のような郷紳観の系列に対して、近來の郷紳観の特色は、それを端的に大土地所有、ないし地主制の一段階ととらえる点にあるといつてよからう。そのような方向は佐伯有一氏の「官紳的土地所有」（「明末の董氏の変」『東洋史研究』一六一、一九五七）というような表現にもうかがえないことはないが、それをはじめ意識的に打出したのは安野省三氏であろう（「明末清初、揚子江中流域の大土地所有に関する一考察」『東洋学報』四四—三、一九六一）。すなわち、氏は從來通念としてみとめられてきた明末における大土地所有の展開を、「郷紳層による大土地所有の一般的成立」と定義し、その主体をはっきり郷紳と認定したのである。ただ、憾むらくは、氏のこの定義が從來の認識内容のいいかえに止まった点である。そこで「郷紳地主層」と対比されるものは、古島和雄氏によつて明初の里甲制体制を支えたと言われた在地地主層であり、その崩壊のあとに、それに代つて登場するのが郷紳地主なのである。しかも、それは「城郭内の郷紳」とも称されているのであるから、「在地地主層から郷紳地主層へ」というこの図式は、まさにかの北村敬直氏の「郷居地主から城居地主へ」のいいかえにほかなるま



い。この時期の郷紳における大土地集積が史上に明らかである限り、このような比定が大方の認識の共通項を形作っていることは疑いないにしても、そこには微妙な位相の差が意識されていたとおもう。氏の断定は、しかし、それを解析するのではなく、むしろ、溶接してしまったという印象を与える。したがって、ここでは郷紳概念も地主制の内容も、すでに与えられたものとして前提されており、両概念が結合すべき必然性、換言すれば、地主制はまさに「郷紳的」と称さるべき固有の内容規定をそこからうけているのか、あるいは「郷紳地主」は地主としての社会関係を高次の形態のうちに止揚し保存・高揚しているものなのか、といった点が問われないのである。

それとともに、問題なのは氏の在地地主制の崩壊→郷紳登場の論理が、里甲制を基調とする国家の農民収奪体系における両者の位置の相違によって、いわば逆比例的に生じたとされている点であって、その先蹤は古島氏にあるものの、地主⇌佃戸制をすでに明初以来基本的階級関係であったとする立場に即するならば、農民層分解は当然、その基本矛盾の展開として説明さるべきであり、国家―農民という視角が無媒介に援用されてはならないであろう。

(九) これに対し、ほぼ同時に郷紳研究への新たな視角を提示された田中正俊氏の場合（「民変・抗租奴変」『世界の歴史』11 筑摩書房、一九六一、及び同巻末座談会「中国の近代化」中の発言）、同じ

郷紳の歴史的な性格をめぐって

く郷紳の登場を里甲制の解体と表裏してとらえつつ、郷紳を「単なる在地の直接の支配者と解するのでなく、旧来の在地の地主支配と異なるような側面をどういうふうにもつようになってくるかということ」に焦点をあわせ、それを生産力の発展と、商品流通の展開とに関連させて構造的にとらえることを提案する。それは一方では、「商業資本と地主と官僚とが一体になってくる、その具体的なあり方として郷紳層というものを、在地でとらえることができる」のであり、他方では、地主の再生産過程からの遊離、すなわち、かつて明初の里長戸層は農村の共同体的な諸機能を握ることによって農村社会に固有の存在意義をもっていたのに、「里甲制が解体して、郷紳層が問題になるころには、郷紳層が農村の再生産過程を侵害したり荒廃させたりしちゃいけないというふうな、郷紳に対する訓戒みたいなものが非常にいわれてくる」、逆にいえば郷紳は「再生産過程の必須の存在となっていていなくて、上にのっかって、名目的な所有に基づく、経済外的な収奪をやっている」というように変化する――それは従来、商人地主（⇌城居地主）、不在地主の発生ととらえられた事実にあやう指摘なのであるが――、それが郷紳的地主の内実として示唆されているのである。ところで、氏はまた一方で、士大夫層一般や郷紳層一般が問題ではなくて、その中の階層分化――土豪的な郷紳と区別されるいわば批判層ともいべきものの形成――



を明らかにすべきだともいわれている。それはいわゆる民変において、民衆と共にその主体となって起上った層を念頭においての発言であろうとおもわれる。ただ、この場合、その視角は、先の地主としての存在形態の変化という視角とは、すぐには統一されえないであろう。それは郷紳の地主としての側面における分化というよりも、むしろ他の側面に分化の契機をもっていると考えられるからである。(氏自身もいわば陽のあたる郷紳と、時局に批判的な「市隠」とに分け、だからその場合は、郷紳・諸生の別をこえるという)。

この点、氏の郷紳イメージはなお流動的であるが、少くとも、氏においては郷紳概念は当初からその中に対立を含んでおり、したがって、それによって地主の特定の存在形態や運動法則を一義的に規定しようとするものでないことは明らかであろう。このことは、氏が郷紳層の出現を「封建社会の花咲ききった時期」におく点と共に、次の小山正明氏の郷紳観との際だった相違点をなしている。

(6) 同じ座談会の席で、それまでの郷紳観が歴史的でないと批評した小山氏は、その後、『東洋史入門』(西嶋定生編、有斐閣、一九六七)において、氏のがくいわば歴史的範疇としての郷紳像のアウトラインを提示した。その構想の特徴は、一言でいえば、かつて氏が中国における封建的土地所有の確立として措定した明末清初以降の地主の存在形態<sup>(8)</sup>を、あらためて郷紳に比定し、更にそれを宋代の

形勢戸・明初の糧長層(これらを氏は歴史的に等質のものとする)に代って登場した新たな支配層とみなす点にある。いま個々の論点は措き、郷紳を郷紳たらしめ、その歴史的性格を決定する契機についてみれば、まず「明代後期以降の貨幣経済、商品生産の発展の中で小農経営の自立化が進み、村落の共同体的地縁結合が成立して、この村落を結合母体とした抗租運動が組織され、里甲制自体が維持しえなくなつては、古い形勢戸・糧長層的土地所有は、その存立の基礎を失つて解体・変質を余儀なくされる」、これに代って「新たに形成されつつあったのが、郷紳による大土地所有であった」として、郷紳は明らかに新しい土地所有形態の構築主体として、その過程を通じて、自らを定立したかの如くであるが、他方、それは「旧来の形勢戸・糧長戸に代って」登場してくる「社会の支配身分」であり、その「成立にあたって重要な意味をもったのは、官僚登用制度としての科挙のもつ社会的機能の変化」であつた、ともされる。手短かにいえば、宋代においては、举人が一回限りの受験資格にすぎなかったのに、明代では生員・举人とも終身資格となり、官僚と共に一定の特権をうけ、(いわば準官僚として)一つの社会層を構成し、他の庶民とは区別され、地方政治に大きな発言力をもつにいたつた、というのである。つまり、ここでは科挙制度一般ではなく、その社会的機能の変化が、郷紳身分成立の契機とされているのであ



るが、それならば郷紳を生み出す以上の二つの契機はいかにして統一されるのであろうか。後者が前提となつて、しかるのち前者の過程が進行したとも、あるいは前者の過程こそが基本であつて、そこから後者の変化が導かれたとも、一応、推量されないことはない。しかし、その内在的連関は定かでない、二つの視角は、郷紳についてのダブル・イメージを構成したまま、どうしても鮮明な像をむすばないのである。おもうに、それは郷紳範疇が土地所有の形態を一義的に規定するものではないこと、また逆にいえば郷紳は土地所有の形態によつてコンパクトに規定される存在ではないことに、改めて注意を促すものではあるまいか。たしかに、地主制の契機は、郷紳範疇の中核として、その歴史的 성격に迫る正しい方向を指示するにしても、両者はもともと完全には重なりあわないのである。

(二) さて、田中氏の場合にも形をかえてみられた、郷紳観におけるこの交錯する二つの視角は、あるいみで、郷紳存在を規定する内容と形式の対立にかかわるといつてよいが、当初からの問題系列にひきつけていえば、ひとまず、それをそれぞれ「国家」と「社会」という視角に照応するといひかえることもできよう。<sup>(9)</sup>つまり、郷紳なる歴史的存在を規定する社会的契機と、国家的（政治構造的）契機と。すなわち、近來の郷紳観がすぐれて土地所有形態と社会的「実体」の視角から接近する傾向をもつたにしても、このいわば上

から、政治的構造的に賦与される「形式」の問題を逸するわけにはゆかなかつたのである。ごく大雑把にいつて、いままで「国家と社会」を統一的に把握しようとする際に、古代史の領域においては、「国家権力」の側を優越させる観点が強調され、逆に宋代以後においては、「社会」の側の実体的關係——たとえば、地主と佃戸關係——を強調しつつ、国家をその論理の中に包摂してゆこうとする方法が対照をなしていたようにおもわれる。そして、それは必ずしも研究領域の差から生じたアプローチの相違にすぎないのではなくて、おそらく中国社会の歴史的展開を反映していたはずである。すなわち、それは、その間に基本的關係の轉移があつたことを示すものにほかなるまい。にもかかわらず、実はそのように明快に裁断しきれないところに、まさに郷紳問題の固有の領域が成立するのである。郷紳を「官僚主義の落し子」とする見方はそれを端的に示している。

つまり、郷紳とその支配は、多かれ少かれ古代的集権国家がつねにもつたところの分権化の方向、集権制の傘の下に一定の特権層を不斷に生み出し、それが権力を私物化し、半独立化してゆくという傾向の中国的あらわれの一つと、ひとまず、みられよう。このような方向をかりに「上からの封建化」とよぶ——それはあくまで「分権化」を指標とする限りでの「封建化」であり、したがって、十全な歴



史的範疇ではないのであるが——ならば、そのようないわゆる官職貴族の形成をもたらしたのと同じヴェクトルが郷紳支配の成立の背後に働いていることは否めないであろう。ただし、ビザンツ封建制の研究において典型的にみとめられるこのような方法からのみ郷紳支配の成立をとくことはできない。いうまでもなく、郷紳は休退職の官僚、ないし官僚予備軍が主体であって、現職官僚が職権を私し、地域の支配を私物化し、更にはイムニテートを確保して、権力を解離させ、分権化をすすめてゆくというコースとは基本的に異なるのである。

このことは中国の官僚制がその地位の世襲をゆるさなかったことと密接に関連している。そのため官僚制を通じての特権はたえず拡散されて特定の家系に固定化されることはなかった。だから、唐末の節度使・藩鎮の跋扈といわれる時期をのぞいて、このような現象は中国にはみられないのである。のみならず、官僚は科举制を通じて絶えず民間から補充されなければならなかった。したがって、郷紳の成立には、あらかじめ、一定の、科举制に適合的な社会層——それを地主層といって多分あやまりないであろう——の存在が分出されていることが前提されるのであって、官僚体系との接触は、そのような階層にとってみれば、その支配の出発点ではなく、むしろそれを完成する過程であつたとする視点が可能にならう。この地主

Ⅱ佃戸関係を封建的生産関係の実現にはかならないとすれば、この基礎過程における、いわば「下からの封建化」——それこそ、固有の生産力段階に照応し、したがって封建制を歴史的範疇たらしめる契機であるところの——のエネルギーを、「上からの封建化」のヴェクトルと結合せしめたものが、すなわち、郷紳支配にはかなるまい。何となれば現職官僚でなく、郷紳としての存在においてのみ、その特権と私的支配とを公然と兼備することができたからである。このようにみれば、郷紳は地主の特定の存在形態をそのまま表示する範疇では、とうていありえないであろう。むしろそれは特定段階の地主のあり方に照応しつつも、本来的に地主をこえた存在であり、その固有の位置によって地主をも系列化する地主、自作農層をも支配する地主であつたと考える。しかしながら、郷紳を郷紳たらしめたその特権的地位は所詮、王朝集権支配の枠内で、それによって保証されたものであり、地主制が本来の封建的支配の原理にもとづいて独自に樹立したものでなかった。いわば領主化しえなかった封建的支配者が、集権制の傘の下で、事実上の関係として極限的に展開した支配、それが郷紳とその支配であつたといえよう。その内限り、郷紳の地位（「特権」）を規定した国家支配の原理と、その内実としての社会的実体は無限に接近しつつも、王朝支配の被覆が破壊されるまで、ついに完全に一致することはなかったのである。



注

- (1) 鈴木中正「清末攘外運動の起源」(『史学雑誌』六二—一〇、一九五三)。
- (2) 更に、郷紳をそのすぐれて近代的な転身の側面を強調しつつとらえ、辛亥革命を事実上牛耳ったとするものに、市古宙三氏の「郷紳と辛亥革命」(『世界の歴史』15筑摩書房)がある。
- (3) 酒井忠夫『中国善書の研究』(弘文堂 一九六〇)。
- (4) これは『学治臆説』巻上、礼士の項を意識したもの。
- (5) このような考え方は最近でもみられる。たとえば石田米子「大官僚と郷紳」(『中国文化叢書 八 文化史』大修館 一九六八)。
- (6) この点については、詳しくは、拙稿「中国封建制研究の方向と方法——六朝封建制論の一検討——」(『歴史科学』三三、一九七〇、のち『歴史評論』二四七号、一九七一に再録)参照。
- (7) 片山誠二郎氏の郷紳観もそうである。「宋代以来官僚制の落し子として生れ、在野指導勢力として、在朝官僚と共に社会構成上同一の階層に属すべき郷紳層は云々」(『明代海上密貿易と沿海地方郷紳層』『歴史学研究』一六四、一九五三)。
- (8) 小山正明「明末清初の大土地所有」(『史学雑誌』六六—一二、六七—一、一九五七—八)参照。
- (9) むろん、この場合、両者を遊離においてとらえることは無関係であるが。

郷紳の歴史的な性格をめぐって

- (10) 渡辺金一「ビザンツ帝国における封建制の問題」(『歴史学研究』二四二、一九六〇)、及び米田治泰「『ビザンツ封建制』研究の動向」(『西洋史学』六六、一九六五)参照。

(11) 周知のように、それを、教養階級ともいふべき士大夫層としてとらえる立場がある。それは郷紳の性格規定にかかわる大きな問題につらなるが、方法的次元を異にするため、紙幅の乏しい本稿では言及を控えた。

(補1) 最近野村浩一氏は「近代国家観への挑戦」『アジアレビュー』一九七一—一の中で、この見方への新たな意味づけをされた。

あとがき

このようなわたくし自身の郷紳観にもとづく立論については、拙稿「郷紳支配の成立と構造」(『世界歴史』一二巻 中世六 岩波書店 一九七一年)における展開を参照されたい。もともと、本稿はその補論の一つとして、いわば導論的役割を担うべく構想されたものである。ただ、そのねらいは、むしろ、前稿において自分を律していた郷紳観から一旦逃れ、いわば、浮身をするように、虚心に、従来の郷紳観の流れに身を涵すことにあった。そこで、もう一度、郷紳へのアプローチを反芻してみたかったのである。だから、これは、もとより、従来の郷紳観を網羅しようとしたものではなく、限られた紙幅の中で、一つの特徴的な流れだけをあとづけた素描にすぎない。

(一九七〇・一〇・一五稿了)